

〈実践報告〉

看護基礎教育における Active Learning の手法を用いた 公衆衛生学教育の試み（第2報）

今松友紀¹⁾ 藤田美江¹⁾ 横山史子¹⁾ 奥山みき子¹⁾
安藤 里美²⁾ 東 裕利子²⁾ 渡辺 孝子²⁾ 吉場 舞²⁾ 根本 正史²⁾

Program Evaluation of Public Health Education Using Active Learning
in Nursing Education (Second Report)

Yuki IMAMATSU¹⁾ Mie FUJITA¹⁾ Fumiko YOKOYAMA¹⁾ Mikiko OKUYAMA¹⁾
Satomi ANDO²⁾ Yuriko AZUMA²⁾ Takako WATANABE²⁾ Mai YOSHIBA²⁾
Masahito NEMOTO²⁾

本研究は、A大学看護学部の看護基礎教育で実施された Active Learning の手法を用いた公衆衛生学の演習プログラムの2年目の取り組みを記述し、学生が捉えた公衆衛生学を学ぶ意義と看護職が禁煙対策に取り組む意義の2つを明らかにすることを目的とした。対象は、2015年度A大学看護学部の学士課程に在籍した2年次の学生であり、2年目の演習は、大学におけるプライマリーインフォーマントとキーインフォーマントに対するインタビュー調査を実施した。その結果、学生は【看護・公衆衛生は全ての人々を対象とすることを実感する】こと、【看護学生として大学の健康増進・予防活動でできることがある】と感じることなどを公衆衛生学を学ぶ意義と捉えていた。また、看護職が禁煙対策に取り組む意義として【人々の生命を守るという看護職の使命を果たすことに繋がる】ことなどをあげており、演習が学生の主体性を高め、自身の看護観を深めることに寄与していることが示唆された。

キーワード：公衆衛生学、看護基礎教育、教育方法、Active Learning、禁煙支援

public health education, nursing education, education method, active learning,
antismoking support

1) 創価大学看護学部 Soka University Faculty of Nursing

2) 創価大学保健センター Soka University Health Care Center

I. 緒言

保健・医療・福祉制度の見直しが図られ、「病院完結型」制度から「地域完結型」への転換が図られている（内閣府，2015）。現在の我が国において、予防の重要性が医療職全体で論じられるようになり（二塚，2006；鈴木，2014）、看護師においても、人々が健康を維持・増進し疾病を予防して健康に暮らせることを支援することが役割として認識されている（日本看護協会，2015）。このような社会情勢にあって、看護基礎教育の中で、学生が公衆衛生学の授業に対して主体的に取り組むことができるよう検討することは喫緊の課題である。

そこで、A大学看護学部（以下、学部）の看護基礎教育では、Active Learningの手法を用いた公衆衛生学の演習プログラム（以下、演習）を3年一纏まりとして計画し、実施することとした（今松ら，2016）。本稿では、2015年度に実施した2年目の演習方法を報告するとともに、学生が捉えた公衆衛生学を学ぶ意義を明らかにすることで、今後の看護基礎教育における公衆衛生学の教授方法への示唆を得ることを目的とする。

II. 方法

1. 対象者

本演習プログラムの対象は、A大学看護学部の学士課程に在籍する2年次の学生である。学生には、演習終了後、演習の内容を実践報告として研究対象とすることの目的と主旨を説明し、同意が得られた者のみを分析の対象とした。

2. 実施方法

1) 授業の位置づけと学生のレディネス

本学部では、公衆衛生入門を2年生の後期科目として位置付けている。公衆衛生入門に関わる周辺領域の講義などについては、第1報を参照されたい（今松ら，2016）。

2年目の公衆衛生入門は、全8回の授業のうち、演習を6回取り入れた。ただし、公衆衛生の基礎知識を学ぶための講義も非常に重要であるため、演習4回は90分の授業時間のうち、45分を講義、45分を演習とし、演習2回のみ90分とも演習を行った。講義の中では、「公衆衛生の定義・対象」「健康・疾病に影響を及ぼす社会的要因」「疾病予防・ヘルスプロモーションの意義と方法」「特定集団の地域看護診断」「健康政策の意義・戦略」について学生に教授している。それぞれの講義の内容については、1年目と大きな変更はしていない。講義に際しては、演習との関連を考えて、具体的な事例を挙げて説明する際、喫煙を取り上げるようにし、授業内に行う小課題の中でも、喫煙をテーマとするなど、学生が喫煙と疾病の関連や喫煙関連の政策を理解したうえで、演習に臨めるように工夫した。

2) A大学における禁煙対策の現状

A大学では、2013年4月1日より大学構内の全面禁煙を施行している。全面禁煙施行後、キャンパス美化健康推進委員会が設けられ、全面禁煙化以降の課題の分析やそれに対する対策を立案する場となっている。全面禁煙化したことにより生じた新たな課題の解決に向けて政策提言や活動を実施する目的で、看護学部で実施している公衆衛生入門の授業でも、この課題を取り上げるようになった。

3) 演習の全体像

演習の目的は、公衆衛生におけるエビデンスに基づいた健康課題の抽出のプロセスと健康課題に即した集団・地域へのアプローチ方法について、演習を通して体験的に理解することとした。演習の全体像は、第1報を参照されたい。

本稿では、2年目の「2014年度に立案された調査計画を具体化・実施し、大学内禁煙対策の政策提言の根拠資料を作成する」取り組みについて記述するものである。

4) 2年目の演習の概要(表1・2)

2年目の公衆衛生入門の授業は、2015年9月16日～11月4日まで週に1回、計8回、実施した。そのうち、演習は第1・3・4・5・7・8回の計6回実施した。中でも、第7・8回目は授業時間90分の全てを演習とした。2年目の演習の内容を表1に示す。

2年目の演習の目標は、「A大学生ならびにA大学の教職員を対象とした禁煙に対する意識や行動の実態を把握するための調査を実施する。本演習で実施した調査を基に、次年度、A大学における禁煙対策の推進に向けた取り組みを考える」と設定した。演習に関わる事前課題は、表1に示すとおりで、事前課題に取り組むことで、学生が講義の理解を深めると共に、喫煙に関する保健統計や国の政策動向、A大学の禁煙・喫煙の現状を理解できるように工夫した。また、事前課題の内容は、調査項目の参考にした。

演習を行うにあたっては、1年目(2014年度)の学生が立案した調査計画を元に調査目的・調査対象・調査デザイン・調査方法についてまとめたものを2年目の学生に提示した。インタビュー調査に当たっては、1年目の学生が立案した計画をそのまま提示するのではなく、地域看護診断(金

川ら, 2011)の手法を取り入れ、調査対象としてプライマリーインフォーマントとキーインフォーマントの2つの集団に教員が整理して学生に提示した。プライマリーインフォーマントとは一般の情報提供者のことであり、ここではA大学の学生・教職員全体とした。キーインフォーマントとはそのCommunityで重要な情報提供者のことであり、Communityのリーダーとなる人々が多い。ここでは、組織の意思決定に深く関与する学生・教職員のリーダーを選択した。

第1回目の演習で教員が提示した調査対象・デザインから取り組みたいものをグループで話し合い、調査対象とデザインを自分たちで選定することとした。その結果、全てのグループがインタビュー調査を選択したため、学生の主体性を尊重し、本来はアンケート調査も実施する予定だったが、インタビュー調査のみを実施することとした。インタビュー調査の対象と調査の実施方法の概要を表2に示す。プライマリーインフォーマント、キーインフォーマント各々から5集団が選出され、学生が対象に応じた調査項目を検討した。第3回と第5回の演習は、調査計画の再検討と調査準備を行った。インタビュー調査は、インタビュアーの技術が必要となるため、第5回目でインタビューの練習を行い、第7回目の授業日をインタビュー実施日とした。ただし、先方の都合で、授業時間にインタビューを実施できないグループもあったため、第6回の講義終了から第8回の講義までのいずれかの時間でインタビューを行った。その際、インタビュー時間は原則60分とし、授業時間90分に対し、残りの30分は調査報告書を記載する時間として割り当てた。大学の門周辺におけるインタビューは1回を10分とするものの1回では必要な内容が得られない可能性が高いため複数回のインタビューを行うこととした。

表1 2年目の演習内容

項 目	内 容
演習概要	A大学生ならびにA大学の教職員を対象とした禁煙に対する意識や行動の実態を把握するための調査を実施する。本演習で実施した調査を基に、次年度、A大学における禁煙対策の推進に向けた取り組みを考える。
演習目標	<p>昨年度の公衆衛生入門を受講した看護学部生が考えた調査計画を参考に、A大学の学生ならびに教職員を対象とした禁煙に対する意識などを把握するためのインタビュー調査を実施できる。</p> <p>1) 調査対象に応じたインタビュー項目を設定し、インタビューガイドを作成することができる。</p> <p>2) 調査を円滑に実施するための事前準備ができる。</p> <p>3) 対象に配慮したインタビュー環境を整え、インタビューを実施することができる。</p> <p>4) インタビューで得た調査データから、A大学における禁煙対策において必要な内容を吟味し抽出することができる。</p> <p>5) インタビュー結果をまとめ、今後のA大学の禁煙対策推進に向けた示唆を提示することができる。</p>
演習前の 事前課題	<p>第1回目：国民栄養基礎調査を用いて、「日本人の喫煙率について、1. 平成24年度の性別の喫煙率（男女の平均）、2. 平成24年度の年齢別の喫煙率、3. 男女の平均の平成元年以降の年次推移」の3点について、数値で述べなさい。また、A大学の喫煙に関するアンケート結果を読み取り、考察しなさい。</p> <p>第2回目：1. 喫煙が人体に与える影響について、具体的な健康問題（疾患名や状態）とリスクの高さなどをなるべく多く書き上げなさい。2. 看護学生として、禁煙プログラムに取り組む意義を自分なりの言葉で述べなさい。</p> <p>第3回目：わが国の健康日本21において、喫煙に関する目標値がどのように設定されているか、また、具体的にどのような取り組みがされているか調べなさい。</p>
演習の 進め方	<p>第1回目 (10分間)</p> <p>【調査対象・調査デザインの選定】 教員が提示した調査対象・デザインから取り組みたいものを学生自ら選定する。全グループがインタビューを希望したことから今年度はインタビューのみ実施することとした。</p>
	<p>第3回目 (30分間)</p> <p>【調査対象のリクルート・調査方法の理解・検討】 1) 割り当てられた調査対象と昨年度の学生が考えた調査計画を確認する。 2) 調査対象が教員でリクルート済みのグループとリクルートしていないグループがある。リクルートしていないグループは、自分たちで対象者を見つけられるか・教員にサポートしてほしいかをグループで話し合い、話し合いの結果を、教員へ報告する。 3) 参考資料『インタビュー・ガイドのデザインとデータの蓄積』を読み、インタビュー調査の方法を確認する。</p>
	<p>第4回目 (45分間)</p> <p>【調査計画の検討】 1) それぞれが課題として行ってきた調査計画を用いて、インタビュー計画について話し合う。 2) インタビュー実施日時・インタビュー対象・インタビュー項目（インタビューガイド）・インタビュー時の対象者への配慮について話し合う。 3) グループとしての意見をまとめて、『インタビュー調査計画書（グループ用）』に記載する。</p>
	<p>第5回目 (30分間)</p> <p>【調査の準備・練習】 第4回目に作成した調査計画書を基に、インタビューの練習を行う。</p>
	<p>第7回目</p> <p>【調査の実施】 1) それぞれのグループが計画の日時に、インタビュー計画書に基づいて、インタビューを実施する。必要に応じて、インタビューした対象者に、タバコの害と保健センターで実施している卒煙相談のパンフレットを渡す。 2) インタビューで聞き取った内容は、各グループで記録・整理しておく。</p>
	<p>第8回目</p> <p>【調査の報告・意見交換】 1) インタビュー調査の結果を、『インタビュー調査報告書』にまとめる。 2) 「今後の禁煙推進対策への示唆」には、今後どのようにして創価大学の禁煙対策を進めていくと良いと思われるかということや、禁煙対策を進める上で一緒に推進するパートナーやキーパーソンとは誰か、また、禁煙対策を進める上で留意すべきことなどを書く。</p>
提 出 物	1) 公衆衛生入門 演習『インタビュー調査報告書』、2) 演習評価シート
演習評価	第8回目の授業終了時に学生が記載した演習評価シートを用いて演習の評価を行うこととした。

表2 学生の調査対象

対 象		調査方法（概要）
イン プ ラ イ マ リ ー ・ マ ン ト	非喫煙者	30分程度のインタビュー
	喫煙者	30分～1時間程度のインタビュー
	卒煙者	30分～1時間程度のインタビュー
	2箇所の門周辺での喫煙者	簡易なアンケートに答えてもらいながらのインタビュー (10分程度)
イン フ ォ ー マ ン ト ・ キ	学長	1時間程度のインタビュー
	保健センターの医師	
	構内全面禁煙関連委員会委員	
	学生自治会長	
	男子寮長	

第7回目で実施した調査を、「公衆衛生入門 演習『A大学における禁煙プロジェクト 今 私たちにできること』インタビュー調査報告書」にまとめ、報告会でグループワークの結果を報告し、学びを深めることとした。報告書の内容は、インタビューの実施日時・インタビュー対象者・インタビュー対象者の属性（人数・性別・学生もしくは教職員）・インタビュー内容で得られた内容・今後の禁煙推進対策への示唆の5項目であり、グループごとにまとめたものを報告会で発表することとした。

演習に関わる学生の提出物は、「公衆衛生入門 演習『A大学における禁煙プロジェクト 今 私たちにできること』インタビュー調査報告書」と「演習評価シート」の2つであり、「公衆衛生入門 演習『A大学における禁煙プロジェクト 今 私たちにできること』インタビュー調査報告書」は報告会の資料として対象学生全員に配られ、「演習評価シート」は教員の演習評価のため回収した。

3. 演習評価のデータ収集方法

1) データ収集時期・時間

2年目の公衆衛生入門の全8回の授業終了後（2015年11月4日）に演習評価シートを用いて

データ収集を行った。演習評価シートの記載時間はおよそ15分であった。

2) データ収集の内容

演習評価シートの内容は、「1. 看護学生として『公衆衛生学』を学ぶ意義・重要性について述べなさい、2. 看護職が禁煙対策に取り組む意義について述べなさい」の2つの問いに対して学生が自由記載で回答するものであった。

4. 分析方法

収集したデータは、問い毎に質的帰納的に分析した。対象者の記述から、問1については、看護学生が『公衆衛生学』を学ぶ意義・重要性について書かれた文脈を、問2については看護職が禁煙対策に取り組む意義について書かれた文脈をそれぞれ抜き出し、その文脈を意味のある最小限の単位として要約して主な記述内容として整理した。整理した内容について意味内容を読み取り、抽象度を上げて学生が捉える意義の小項目を抽出し、さらに抽象度を上げ、学生が捉える意義の大項目を抽出した。分析にあたっては地域在宅看護学を担当する教員間で、内容を確認し、結果の信頼性・妥当性を高めるよう努めた。

5. 倫理上の配慮

本演習の対象となった学生に、公表の目的および方法の説明は、演習の科目責任者以外の教員から行い、研究の参加は任意であり、参加しなくてもなんら不利益を生じないことを保証した。また、研究への参加が成績に影響しないことを保証するため、公表参加への意思表示は、公衆衛生入門の成績処理が終わった後に実施した。研究説明を行った後、研究への同意について口頭で確認し、同意が得られた学生の演習評価シートのみを分析の対象とした。

得られたデータは漏洩なきよう厳重に保管するとともに、目的外の使用をしないこと、対象者の個人が特定されないよう取り扱いに最大限の留意をすることを保証した。

なお、公表については創価大学人を対象とする研究倫理委員会の承認を得た（承認番号：27084）。

Ⅲ. 結果

1. 対象者

公衆衛生入門の受講者で演習評価シートの提出者は81名であり、そのうち、研究の参加への同意が得られた演習評価シートの分析対象者は65名（80.2%）であった。

2. 2年目の取り組みの様子（写真1、写真2）

事前課題の提出率は、平均で92.0%と高い水準で推移し、演習開始前の準備は、ほとんどの学生で整えられて、開始できた。

実際に調査で大学内の様々な関係者から話を聞くことができたことで、大学内で課題になっていることを解決するために、どうしたらよいかを学生が真剣に考える機会となった様子であった。また、総合大学の中にある看護学部の意義についても深く考えるようになっていく様子だった。



写真1 演習風景

報告会では、それぞれの行った調査結果を発表するとともに、A大学における今後の喫煙対策への示唆が発表された。学生から「今は教職員の一部の人が禁煙対策に動いている状況であり、学生主体の活動が求められる」「学生にタバコの実感してもらう」「卒煙キャンペーンを実施する」などの意見が出され、今後、大学内で実施可能である内容も含まれていた。示唆の中で共通して見られたのが、学生主体の働きかけの必要性和タバコに関わる情報の普及啓発が必要であるというものだった。



写真2 報告会風景

3. 演習評価シートから読み取る学生の学び (表3・4)

演習評価シートから読み取った看護学生として『公衆衛生学』を学ぶ意義を表3に、看護職が禁

表3 看護学生が「公衆衛生学」を学ぶ意義

学生が捉える意義		主な記述内容（一部抜粋）
大項目	小項目	
人々の健康を守る為に保健統計や知識を学ぶことで健康増進についての思考を身につける	データにより患者の疾患の原因を推測する	保健統計を知ることで患者が何らかの臓器に異常をきたした際も原因を考え複合的に思考することができ対処しやすくなる 科学的根拠やインタビュー結果、人口統計から一人一人の健康を真剣に考えることにより病院に来る人の数も減少できる
	日本の健康課題の現状を知る	自分の国である日本が、現在、どのような問題を抱え何を改善していかなければいけないのかということに気づいた 公衆衛生の目的を果たす為に地域の特徴や背景などを始めとした日本の状況を把握する必要がある日本の状況を知り、そこから起こる危険までも捉え広い視野を持って患者さんに向き合っている様になるために必要
	知識を得ることで周囲へ伝えることができる	正しい知識を学び、最新のデータと過去のデータを比較し、インタビューすることでさらに知識を深められる皆が健康でいられる為にどのような取り組みがありどのようなサポートがされているかを知ることが必要である 疾病の予防に欠かせないものとして健康教育があり看護学生としてもその点について意識し健康や病気に関する知識を正しく周囲の人々へ伝え理解してもらう為
	国民の健康を守る為に、多角的に集団をみたり、より深い視野を身につける必要性を学べる	全体の健康を考えていく上で様々な保健統計やその地域の人々の健康状態からどこに目を向け、問題の焦点化を特定する力をつける 看護職の成すべき目的に繋がり視野を広く持ち看護職という職に対しての考え方を深めることができる人々の健康問題を幅広く知ると同時に、視野を広げ様々な角度から問題を抽出し健康増進へ向かうことができる予防対策の必要性を学ぶ 国や世界の健康の状況や人口増減、死因などについて知ることにより深い視野を持つことができる
看護・公衆衛生は全ての人々を対象とすることを実感する	公衆衛生の対象が集団であることを自覚できる	病気になる人も健康な人も公衆衛生の対象になっている 集団を対象としている所から考え方が変わってくる 目の前の患者だけを見るのではなく、病院には辿りついていないが自覚症状を訴える者や病院にいかうか検討する程の状態になっている者がいるということを認識
	看護は全ての人を対象に健康増進の取り組みをする	看護の対象は病気の人だけでなく、健康な人の健康を守り病気を予防すること 看護の対象は健康の程度によらず全ての人が対象となるため 病気を持つ人々だけでなく全ての人々を対象とした取組によって寿命を延ばすこと 個人だけでなく集団として健康を考える力を身につけ疾患に対する看護ではなく疾患を持つ人の背景を理解して人それぞれの看護の重要性を感じ実践できる
健康増進の概念・手段を学ぶ	人々の健康の為に具体的な解決方法等を考えていくことができる	自分のコミュニティーへ健康の意識を高めてもらえるような呼びかけをどう行っていくかを学ぶヒントを得られる 健康や病気に関する知識をより多く得ているからこそ自身の健康を保ち対象者へ伝えていくことが必要 公衆衛生の向上は病院や施設で行われている医療と同様に、同じ健康を求める活動である為 今勉強中の自分達だからこそ問題に直面した当事者の方と共にその問題を解決していく手立てを思索し行動していくことができる
	ヘルスプロモーションについて学ぶ	ヘルスプロモーションという考え方を知っているか知らないかで患者さんに向き合う時の関わり方は大きく変わってくる 避けられる病気を避けることで救える命がありヘルスプロモーションという考え方も健康を手に入れられるだけでなく、その先の自己実現や地域の活性化にもつながっている
	健康に導くための方法を学ぶ	全ての人々の健康を守る為にどうすればよいかを学ぶこと どこにしようかと人を健康にしていこうという考えが根底にあり具体的に地域でどの様に行っていくのかを考えることができるため 人々の命を守る手段を得る
健康保持には予防が重要であることを学ぶ	予防の視点をもって健康を保持することを考える	看護職をはじめとする医療従事者は人々の健康を守る役目があり健康でない状態にならない様にする予防も大切である 予防的な観点をもって患者への生活指導を行う上でも予防に関する知識は必要 予防する為にどの様に人を巻き込んで、地域の医療を改善し、行政などと協力してどの様に健康保持することができるのかを考えることができる
	予防方法について具体的に知り行動に繋げる	疾病予防の方法や取り組みを知り、家族や友人、近所の人等身近な人々に伝えていくことができ、この様な行動をとることで人々の健康意識が高まり健康増進に繋がる 数値化された情報を一般の人に提供することで今どの様な現状で今後どうしていかなければいけないという事を伝えることができれば様々なことを予防することに繋がっていく これからの変化していく社会に生きる人々が健康を保つ為にどの様な予防をすればいいのかを考える為の軸になると考える
	健康になるためには予防が大事であると認識すること	看護職の目の前にいる患者の疾病は公衆衛生の改善から予防できたのかもしれないと考え、公衆衛生を学ぶことは必須である 病気の予防、対策を考えるなど健康管理の必要性を認識、再認識してもらうことが必要
	疾患に罹患している人を早期発見・早期治療することで悪化させない	知識と資料、情報から病気の原因、要因を分析し病気の拡大を防ぐ 病人を早くみつけ早く必要な治療を行い普通の生活に戻し人々を一層健康な状態に保つこと 予防することを概念として「病気にかかりそう」な人を放っておくのではなく、できる限り病気にかかる人を減らしていくこと 異常を未然に防ぎ、健康を守り健康であり続けるだけでなく、悪化させないことにもつながってくる患者を治す前に患者数を増やさないために病気を予防する

学生が捉える意義		主な記述内容（一部抜粋）
大項目	小項目	
看護学生として大学の健康増進・予防活動でできることがある	学生の立場でできることがある	看護学生自身の健康や意識だけでなく自分の周りの友人や患者まで影響を及ぼすことができる 学生が知っていた知識を身近に存在する対象へと共有することにより多くの対象が対象自身の健康に対する意識を持つ 大学という大勢の人々が集まる場所には様々な感染症が蔓延しやすく危険な場であるが呼びかけや活動の実施など一気に一人一人へ情報、知識を伝えられるチャンスである
	自分の身近で健康に対する知識を伝える	友達や家族などに正しい知識を教え、そして理解させ生活態度を変えるように促すこと 身近な人に公衆衛生の大切さを同じ立場にたって伝えることができる
看護職になった際の実践力を高めることに繋がる	患者さんの退院後の生活を考えていくことに繋がる	病院内にいる人の健康や退院後の生活の環境を考えていくことになる 将来的に医療従事者になった際に患者さんの退院後の健康を守ることに繋がる 患者が退院した後、健康的な生活を維持する為のものである 将来看護職について時に患者さんと地域住民の方等の健康を守るという役割を果たす為に学ぶ必要がある
	よりよい看護やケアの実践に繋がる	看護職になった際に健康寿命を延ばし自分の生活を送れる支援を実施できるようになるため 環境等の根本的な原因となりうるものにアプローチすることは看護をする上でも患者さんへの理解を深め、周りの人の支援を得ることを促し、社会的要因がどう健康や疾病に影響しているかなど広い視野でアセスメントできる 病院で働くことの違いや地域の人と密接に関わることから新たな視点で患者のケアについて考えることができる
	科学的根拠や知識をもって他者に説明する力は看護職として活用できる	対象が万人であり、病気を患っている人に関わらず幅広く予防し、科学的根拠や説明する必要性を学ぶ 他の科目を勉強をする時にも科学的根拠を大切にするという点について生かすことができる 多職種が目的を共有しそれぞれの立場の強みを活かし、解決策を話し合うプロセスは今後、活用することができる
	地域全体の健康水準をあげることも看護職の役割であると認識できる	健康を任せられた責任としてその地域全体の健康に対して常に目を配る必要がある 健康の水準をあげていくことも看護者の役割であることをしることができ気づくことができるため そのこと健康維持・増進により社会的要因について地域住民が能動的に健康増進に取り組むことができると考えられる 医療と公衆衛生の2つがうまく機能すれば社会全体として健康になっていくと考える
	保健職の仕事内容を深めることができる	保健職の仕事について学ぶ機会であり多職種連携の必要性が叫ばれている時代で色々な職業に対して興味関心を持てるチャンスとなる 保健職は年齢に関係なく様々な人と関わり地域の健康を守っている役割があることを学んだ
健康を促す為に環境が人に与える影響を知ることと環境づくりが大切である	地域全体を対象に視野を広げて健康づくりをしていく必要性がある	地域の健康という広い視野で健康を促進することができる 少しでも多くの人々の健康を守る為、疾病に罹患している人だけでなく、その前段階にある人々まで視野に入れ、地域全体の健康を守り支えていける様に学ぶ 地域社会という大きな枠組みで健康を増進していく為に必要
	集団や社会にも影響があることを知る	自分自身の健康・疾病予防に関する知識を身につけ、個人として自分が住む地域など集団として捉え考えていく力をつけていくため 病気は個人の健康状態が原因になることが殆どであり社会環境なども大きく影響していると考えられる 為社会という集団で考えることができる 自分が感染しなければいいという考え方から、集団で生活している以上、一人の問題ではなく集団全体の問題であるということを実感できる 対象が個人であり集団である為社会にも経済にも影響がある 調査を通し、社会の健康に対する意識や取組みの姿勢によって地域社会の健康の在り方が変容し公衆衛生の状態が社会全体に及ぼす影響を左右している 社会的な危険因子を見つけることができ病気が発生したり深刻化したりする前に地域住民の健康を維持・増進が可能になる
	健康にむけての環境づくりに視野を広げる	多くの方々の生活環境をよりよいものにする 健康が環境によって多くの影響を受けていることを知り、身体が危険な状況にならない為 より生活に根ざしていて疾病の予防や健康増進をつとめていくことは病院だけでは対応できない 人々の生活環境にアプローチするきっかけになる 今いる環境の中で自分ができることを具体的に考えて行くことができる 全ての人ができる限りその人らしい一番望む人生を送れる様に健康を支援できる様な環境を作ることがとても重要である

煙対策に取り組む意義を表4に示す。

本演習評価シートから、看護学生として『公衆衛生学』を学ぶ意義を分類・整理したところ、7つの大項目が抽出された。また、看護職が禁煙対策に取り組む意義については、5つの大項目が抽出された。以下に、学びの小項目を《 》、学びの大項目を【 】で表記し、詳細を記述する。

1) 看護学生として『公衆衛生学』を学ぶ意義

【人々の健康を守る為に保健統計や知識を学ぶことで健康増進についての思考を身につける】

看護学生として公衆衛生学を学ぶ意義について、学生は《データにより患者の疾患の原因を推測する》必要性や《国民の健康を守る為に、多角的に集団を見たり、より深い視野を身につける必要性を学べる》と感じており、公衆衛生学を学んだことによって【人々の健康を守る為に保健統計や知識を学ぶことで健康増進についての思考を身につける】ことが重要であるという認識になっていた。【看護・公衆衛生は全ての人々を対象とすることを実感する】

講義・演習を通して学生は、《公衆衛生の対象が集団であることを自覚できる》と考えており、さらに公衆衛生を学ぶ意義として《看護は全ての人を対象に健康増進の取り組みをする》ことを認識しており、看護の対象は病院に入院し疾患をもつ個人のみならず、全ての健康レベルの人々を対象に健康増進を行うことも看護の範疇であると認識するようになっており、【看護・公衆衛生は全ての人々を対象とすることを実感】していた。

【健康増進の概念・手段を学ぶ】

講義・演習により学生は、《人々の健康の為に具体的な解決方法等を考えていくことができる》ことを実感し、《健康に導くための方法を学ぶ》ことに意義を感じており、看護学生として【健康

増進の概念・手段を学ぶ】ことの意義を感じていた。

【健康保持には予防が重要であることを学ぶ】

学生は《予防の視点をもって健康を保持することを考える》ことに意義があると感じており、《予防方法について具体的に知り行動に繋げる》ことも必要であると感じており、【健康保持には予防が重要であることを学ぶ】ことが公衆衛生の分野では重要であると感じていた。

【看護学生として大学の健康増進・予防活動でできることがある】

演習を通して学生は、《学生の立場でできることがある》と感じ、《自分の身近で健康に対する知識を伝える》など、ただ学習として公衆衛生を捉えるだけでなく、Communityメンバーの一員として、また看護学生として自分たちにできることが何かを考え実践しており、【看護学生として大学の健康増進・予防活動でできることがある】と考え、実践していくことに公衆衛生学を学ぶ意義を感じていた。

【看護職になった際の実践力を高めることに繋がる】

学生は《科学的根拠や知識をもって他者に説明する力は看護職として活用できる》と感じており、インタビューを通し、看護職以外の人達と対話することで、科学的根拠や知識を持った専門職として、他者に説明する力を持っていることの重要性を感じていた。また、《地域全体の健康水準をあげることも看護職の役割であると認識できる》と考えており、看護の対象に対する捉え方が地域全体まで広がりを見せていた。公衆衛生入門の講義と演習を通し、看護職に実際になった際の技術や視点の成長が見られ【看護職になった際の実践力を高めることに繋がる】と捉えていた。

【健康を促すために環境が人に与える影響を知ることと環境づくりが大切である】

講義や演習を通じて学生は《地域全体を対象に

表4 看護職が禁煙対策に取り組む意義

学生が捉える意義		主な記述内容（一部抜粋）
大項目	小項目	
知識と根拠がある為人々をより健康に導ける	たばこについて専門的な知識をもっている	一般の人よりたばこの害について知っている看護職が禁煙対策に取り組むべき たばこの害をきちんと理解している看護職だからこそ、積極的に取り組む 喫煙による身体の影響を知らずに喫煙している人も多い為看護職が専門的な知識をもった上で禁煙対策に取り組む意義がある たばこを吸うことで害があることや疾患にかかってしまうことが分かっている看護職の人達から喫煙の恐ろしさを伝え、未然に防いでいく必要がある 喫煙によって引き起こされる健康問題についてより専門的な知識を持っている
	知識があるため説得力がある	医療知識をもっている看護職が取り組むことで説得力や信憑性がある 病気に関する知識、原因、予防に関する知識を持っている看護職が禁煙対策に取り組むことによって説得力がある 看護職が禁煙することの利点を伝えることで大きな説得力が生まれると考えられる
	根拠のある説明をすることで納得しやすい	専門的な知識があり身体への影響や周囲への害について知識をもった根拠のある説明をすることができる 説得力があり喫煙者に禁煙をしてもらい納得しやすいと思う
	身体に与える影響について知識を発信する	（看護職は）なぜ喫煙がいけないのかを様々な知識を通して発信し共に改善へと進んでいく必要がある 個人、集団の健康、環境を守っていく為また自分が発信源となり情報を広めていくこと 健康に関して知識をもち、喫煙による身体に与える害について知識を普及させる 具体的な身体への悪影響について専門的な知識を共有することが可能である 知識の提供が看護職の役割である たばこが身体に与える影響などを知っている知識を伝える
	知識をもっている看護職は健康を守る責任がある	看護職は健康に関する知識がある 知識を持っているからこそ、人々の健康を守る責任がある 健康や病気についての知識を得ている医療看護職はなおさら強く推進していく必要がある
喫煙のリスクを予測できる看護職だからこそ疾病予防を普及できる	看護職は喫煙後の身体に起こるリスクを予測できる	喫煙とそれに関する疾病との関係は非常に直接的で明快になっている たばこを吸い続けた時のリスクを予測することができる 看護職は害を受けることで身体にどんな変化が起こるのかを学んでいる 喫煙によって入院してきた方の状態を知っているため喫煙によって将来どのようになってしまうかの説明を具体的に言い、危機感をよりもってもらい たばこを吸うことの害や身体の影響についても理解している
	疾病につながるリスクを減少させる	一人の人が少しでも健康で長生きできる様に危険因子をなくす為 喫煙者の背景をしっかりとらえて、喫煙のリスクを無くす 一般の人より身体構造や喫煙によるリスクを知っている 様々な悪影響を起こさない為
	喫煙による疾患を予防し人々の命を守る	看護職は疾病の予防にも務める 保健統計を学び呼吸器疾患で苦しむ人を間近で支えている看護職は防げる疾患に罹患しない対策に取り組む 新たな喫煙者を増やすことを防げると考える 疾病予防の一次予防であると考えられる 多くの人の疾病の原因ともなっているたばこを吸うことをやめる様にすることで病気になることを予防できる
	喫煙者だけでなく周囲の人々の健康を守る	喫煙者だけでなく、非喫煙者の健康を守る為 健康被害を知っている看護職の立場としてたばこを吸っている人だけではなく、周りの人にも被害があるということを知ってもらい 人類の健康の為に、吸う人やその周りの人にも害を及ぼし何一つ利点のない喫煙という行為を減らしていく 百害あって一利なしの喫煙から一人でも多くの人を守る為 禁煙のサポートをし続けていくことが大切である

学生が捉える意義		主な記述内容（一部抜粋）
大項目	小項目	
看護職の関わりを継続することで卒煙に繋がることがある	卒煙に対する支援を実践し続けることで人々に貢献できる	皆の健康を願うだけでなくそれを実践に移していくことで初めてその役割が果たされる 身近な喫煙者を見過ごさず寄り添いながら禁煙のきっかけとなれる様な関わりが看護職の役割である 喫煙者の気持ちを理解した上で喫煙している原因を探し、その人の健康を考え看護していくことができる
	対象者に合わせて関われる	看護職が一人一人に寄り添うことでより禁煙に繋がりがやすくなるのではないかと 喫煙の悪影響の再認識、またその現状を知ることでその場の環境や喫煙者の心理面から喫煙者に寄り添うことができる 一人一人にあった解決策と一緒に見つけることができる 喫煙することが普段のストレスを解消することに繋がっている人も多くおりその様な一人一人のことをしっかり考えた上で看護職は健康についても考えていく必要がある ハイリスクアプローチ、ポピュレーションアプローチを自身のまわりから実施し、健康を害することがないようにしていくべき禁煙に対して考えていくことができると思う
	看護職自身の禁煙に対する意識が高まる	どの様にしていけば禁煙に繋げていくことができるかを学ぶ 知識を得た上で、禁煙の種まきを行うことが大切である 喫煙者の今後の健康を守る為にも禁煙対策をし、健康教育を行うことで健康維持増進に繋がる
	健康教育を行うことで健康な社会づくりに貢献できる	患者に健康教育を行ったり、人々の健康を守る立場にある 健康を守るもの（職業人）として健康を増進する為 地域へ発信させることや生活習慣の見直しや喫煙する前に防ぐような教育を行うことができる たばこを吸っている人は被害者であり患者であるため吸わせている環境や周り等がいけないということも含め、看護職がケアをしていくことが必要
多職種との連携や環境づくりを実施することができる	環境調整や環境づくりが重要	生活の中での禁煙をすすめる喫煙が原因となる疾患の予防やたばこのない生活のよさを社会全体に広げていくこと 個人や社会に対して看護職だけがこの課題に取り組み、目的を果たしていくのは難しい為多職種との協力の中で看護職の役割を果たす必要がある 個人の健康を守ることでありまた地域全体の健康を守ることに繋がる たばこの害を発信していくことでたばこのない未来をつくっていくことができる 喫煙の問題は、個人だけの問題ではなく国民全体の集団の問題である 健康を医療的に理解する看護職のサポートにより、よりスムーズに根拠をもった地域での環境づくりにつながると思う
	看護職には喫煙者と病院・行政など多職種をつなぐ役割がある	看護職からの専門的な知識を提供し、扱ったことがない方はこれから扱ったことがない様に喫煙者には資源、サービス等の情報提供を行い、これからの健康をサポートしていくという意義がある 看護職はその集団の健康を守るという立場にあるだけでなく患者を指導する立場にもなり行政や住民をつなぐパイプとしての役割も大きい 科学的根拠に基づき病気に対する知識のあるものが喫煙という現代の問題に取り組むことは義務である
人々の生命を守るという看護職の使命を果たすことに繋がる	職業上の義務である	喫煙することから引き起こされる健康被害や周囲への被害など目の当たりにする看護職が禁煙対策に取り組むことは義務である 看護職としてあたり前のことである 身体について学ぶものとして、たばこについてその害について学ぶことや対策に取り組むことももちろん当たり前のことである 看護職が率先して動くべきである 看護職が喫煙や禁煙による様々な影響を社会に提唱していくことは、人々の健康を握る者として喫煙に関する健康意識の変革を一般世間に巻き起こすことができる
	健康に対する知識と責任を持つ看護職が禁煙対策を実施することで世の中に影響を与えることができる	健康問題に関する専門的な知識をもった看護職が禁煙対策に参加することで喫煙する人にたばこに関して深く知ってもらえる機会になる 看護職が禁煙対策に取り組むことに大きな影響がある 看護職は病院だけでなく、企業や地域等、様々な場所にいる為目の前にいる一人一人の状況や喫煙、禁煙者の関わらずたばこがもたらす影響なども伝えることができる 責任がある立場にいる者は、その分発信する情報、言葉、行動に影響がありその影響力を有効に使っていくべき 人々の QOL の維持・向上は看護の目的の一つである為
	看護職の仕事は人々の健康増進と健康寿命の延伸である	人々を害から守り、その人の生活に輝きを与える為（に必要である） 多くの人に自分の健康についてよく考えられる様にわかりやすく伝えられる様に看護職が意識を持つことが大切である 多くの人の知る権利を十分に満たす必要がある 人々の健康を維持・増進していく働きかけをする使命がある 看護職は患者、回りの人の健康を第一に考えケア、援助する立場であり喫煙により健康に害を及ぼす人々を食い止める必要があると考える
	命を守り・尊さを伝える	一人一人に生命の重さと尊さを知ってもらうためにも私達から広めていく必要がある たばこによる害を喫煙者、非喫煙者の両方から遠ざけ人々の健康と命を守り寿命が縮まるのを少しでも防ぐこと 人の命を預かる仕ことである 将来人の命を守る立場として、禁煙指導が必要になった時に自分自身が健康を増進し守っていなければ患者さんの健康を守っていけないと思う為
	患者の健康を守るためには自分が健康である必要がある	自分自身が喫煙者とならない為 医療関係者の喫煙率が高いことが大きな問題である 喫煙している看護職も多いということもあり、まず自分から健康に取り組むのがよいと思う。 健康を守る職種として自分も含めた周囲の健康を勝ち取るため

視野を広げて健康づくりをしていく必要がある」と感じており、さらに「健康づくりに向けての環境づくりに視野を広げる」ことが、公衆衛生学を学ぶ意義であると感じていた。つまり、【健康を促すために環境が人に与える影響を知ることと環境づくりが大切である】と考えており、環境の変容を推進することも看護職の役割であることを認識していた。

2) 看護職が禁煙対策に取り組む意義

【看護職は知識と根拠がある為人々をより健康に導ける】

学生は看護職が禁煙対策に取り組む意義として、「知識があるため説得力がある」ことや「根拠のある説明をすることで納得しやすい」など看護師が健康に関する知識をもち根拠を持って説明することに着目し、【知識と根拠がある為人々をより健康に導ける】と捉えていた。

【喫煙のリスクを予測できる看護職だからこそ疾病予防を普及できる】

学生は、「喫煙による疾病を予防し人々の命を守る」ことを看護職が禁煙対策を行う意義だと感じており、「喫煙者だけでなく周囲の人々の健康を守る」ことも重要であると考えていた。

【看護職の関わりを継続することで卒煙に繋がることもある】

学生は、「卒煙に対する支援を実践し続けることで人々に貢献できる」と考えており、「対象者に合わせて関わられる」という看護職の強みを活かして、対象者に関わり続けることの重要性を感じており【看護職が関わりを継続することで卒煙に繋がることもある】と考えており、個別に継続的に関わることが看護職が禁煙対策を行う意義だと感じていた。

【多職種との連携や環境づくりを実施することが

できる】

学生は「環境調整や環境づくりが重要」と感じていた。さらに「看護職には喫煙者と病院・行政など多職種をつなぐ役割がある」と認識しており、喫煙者への直接的な援助だけでなく、人的環境と物理的環境をあわせた人々を取り巻く環境を整備することで、喫煙者の卒煙を手助けしたり、非喫煙者の防煙対策や受動喫煙の防止を担っていくことができると考えていた。

【人々の生命を守るという看護職の使命を果たすことに繋がる】

学生は、そもそも禁煙対策は看護職の「職業上の義務である」と捉えており、「看護職の仕事は人々の健康増進と健康寿命の延伸である」とも考えていた。さらに「命を守り・尊さを伝える」ことも看護職の果たすべき役割であると思っており、看護職が禁煙対策に取り組む意義として【人々の生命を守るという看護職の使命を果たすことに繋がる】と考えていた。

IV. 考察

1. Active Learning を用いた演習の効果

演習評価シートから読み取った公衆衛生学を学ぶ意義として、【人々の健康を守る為に保健統計や知識を学ぶことで健康増進についての思考を身につける】ことや【看護・公衆衛生は全ての人々を対象とすることを実感する】体験をしていた。これらは看護の対象が個人だけではなく集団・地域も含んでおり、集団となった対象を理解するために保健統計が必要であることが理解できたと考えられる。さらに【健康増進の概念・手段を学ぶ】【健康保持には予防が重要であることを学ぶ】のように、具体的な健康増進の手段や予防の重要性など、健康増進・疾病予防という公衆衛生の主要概念を

講義と演習を通して、学んでいたことが窺われる。学生は【看護職になった際の実践力を高めることに繋がる】と自己の将来像に照らして、本授業の意義を捉えるとともに、【看護学生として大学の健康増進・予防活動でできることがある】と現在の自分たちにできる役割を模索し、実践する行動が見られた。Active Learning は主体的学習と訳すことが可能(入江, 2015)であり、学習の主体性を高める目的で導入されるものであるが、本演習では実際に大学内で起きている課題を取り上げ、課題解決に向けて学習に取り組んでもらったため、学習の主体性のみならず、問題解決への主体性も高まったものと考えられる。

また、看護職が禁煙対策に取り組む意義として、【人々の生命を守るという看護職の使命を果たすことに繋がる】と看護職に備わる役割を深く捉えることになっており、これから看護職になっていく自分たちが健康情報の発信者になることの重要性を学んでいた。このような学生の学びは、実際に起きている健康課題に取り組むことで得られたものであり、学生の看護観を深めることに繋がったと考えられる。

2. 3年目に向けた課題

2年目の取り組みで、大学内のプライマリー・キー、双方のインフォーマントにインタビューに行ったことで、公衆衛生学の対象の広さ・実際の問題を解決する方法の一端を体験的に理解できたことは、2年目の演習の成果と言える。また、大学で実際に起きている健康課題に関心が向き、学生としてできることを模索したことは学習上だけでなく、実際の問題解決のためにも意義あることと考えられる。2年目の取り組みから、大学の健康課題解決のための示唆が得られた。来年度の課題として、2年目の取り組みから得られた健康

課題解決に向けた具体的アプローチ方法を検討することが挙げられる。さらに、本演習は大学における健康課題の解決に寄与するという目的を持った取り組みであるため、目的に向けた大学内の取り組みが変化してきているかについてもモニタリングすることが、3年目に向けた課題と考えられる。

(本研究における利益相反はない)

引用文献

- 二塚信(2006). 高齢社会と地域医療における大学の役割. 九州看護福祉大学紀要, 8(1), pp.5-9.
- 今松友紀, 藤田美江, 横山史子, 他(2016). 看護基礎教育における Active Learning の手法を用いた公衆衛生学教育の試み(第1報), 創価大学看護学部紀要, 1(1), pp.25-36.
- 入江詩子(2015). アクティブラーニング導入期における参加型学習の役割. 地域総研紀要, 13(1), pp.23-34.
- 金川克子, 田高悦子編(2011). 地域看護診断 第2版. 東京: 東京大学出版会.
- 内閣府(2015). 平成27年度版高齢社会白書, 10月30日, 2015年.
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/pdf/mokujil.pdf>
- 日本看護協会(2015). 2025年に向けた看護の挑戦「看護の将来ビジョン いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護」, 10月30日, 2015年.
<http://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf>
- 鈴木忠義(2014). 日本の高齢者人口問題とこれからの予防医学—現状と今後の展望—. 予防医学, 56, pp.7-18.